



TITLE:

カルバー46センチ望遠鏡一時帰郷 の事情

AUTHOR(S):

坂井, 義人

CITATION:

坂井, 義人. カルバー46センチ望遠鏡一時帰郷の事情. 第3回天文台アー
カイブプロジェクト報告会集録 2012: 7-11

ISSUE DATE:

2012-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164309>

RIGHT:

カルヴァー46 センチ望遠鏡一時帰郷の事情

坂井義人

(1) はじめに

山本一清博士遺愛の 46 センチカルヴァー反射望遠鏡については、筆者はこれまで色々な見地からその報告を続けてきた。特に、神道系宗教団体・三五教(アナナイ教)による教義としての天文の展開と山本先生との関係、また滋賀県の山本天文台より同教団の沼津市香貫山の山頂のアナナイ中央天文台に望遠鏡の貸与移設の紹介など、その概要はおおよそ明らかに出来たのではないかと考えている。

しかしながら、ここには筆者も今まで余り認識をしていない事実が脱落をしていたことが判明し、今回そのあたり事実関係を可能な限り明らかにすべく、以下を紹介したい。

この報告に当たっては、昨年初夏、山本天文台より先生の全遺品の京都大学寄付移管に端を発し、その中よりカルヴァー46 センチ望遠鏡の山本天文台一時帰郷を物語る写真が日の目を見たことに起因する。宇宙物理教室の富田良雄氏のご指摘によるこの事実は、より詳細なる同望遠鏡の足跡とその意義を語る上で、補完的事象としては重要であり、以下、多少の推論も交えての事実関係を明らかにすることを意図したものである。本報告によって、より詳細なる時事関係が明らかにされていくことを、最も期待するところである。

(2) カルヴァー46 センチ望遠鏡変遷の概要(山本博士逝去前)

46 センチ望遠鏡の各所への移動の時期は、再確認の意味で以下に略儀記述する。今回は、その前後の事象と、山本先生のご逝去後もアナナイ中央天文台に預けられたままとして暫く推移し、またその後の同望遠鏡の足跡を明らかにするものである。

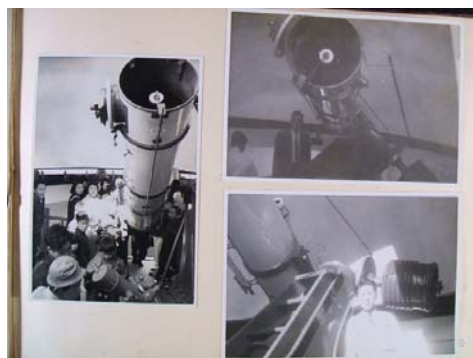
- ・イギリスよりカルヴァー46 センチ望遠鏡を輸入昭和 2 年・1927 年
- ・京大・花山天文台開台、昭和 4 年・1929 年望遠鏡設置
- ・滋賀県上田上村の実家に田上天文台開台望遠鏡移設、昭和 15 年・1940 年
- ・沼津市香貫山アナナイ中央天文台貸与移設、昭和 32 年・1957 年
- ・教団との意見相違により山本先生一時帰郷、昭和 34 年 1 月・1958 年逝去



花山天文台昭和 4 年



田上天文台昭和 15 年



アナナイ中央天文台昭和 32 年

上記の写真三枚は、カルヴァー望遠鏡活躍時の変転を示す写真である。輸入されてから、国内最大の反射望遠鏡と謳われた時期でもあり、当時の天文解説本などにも、その雄姿が描かれたり、最も面目を保った約 30 年の活躍を物語るものである。この望遠鏡の果たした役割は、研究及び市井教育に自他共に誇り高きものであったに相違ない。

(3) カルヴァー望遠鏡変遷の新たな真実

山本先生のご逝去後のカルヴァー望遠鏡は、暫くの間は主不在とも言うべきアナナイ中央天文台に残されたままとなった。山本先生とアナナイ教団側は、運用上の問題から一時的相反的な状態となり、その上に余りにも突然のご逝去は、望遠鏡も貸与継続のままという双方にとっては、痛ましいという名詞以外、表現のしようが無いほどの事だったろう。私事ながら、師の指図として色々とかかわり合い持った亡父は、大いなる誇りから奈落の底を見た思いとなり、生涯のトラウマと化した事は想像に難くない。

さて、山本先生の最晩年の事象は、おおよそ以上で誤りは無いと思われる。しかしながら、筆者は迂闊にも、望遠鏡自体の僅かな時間の隙間を見落としていた。山本遺品が京大に寄付移管されて一年、そのあたりの多少込み入った事情が、教室の富田良雄氏からの問い合わせと指摘という形から浮上してきたのだった。本年の6月の事である。

山本遺品には、観測データーを始めとして、人間関係を大切にされた数々の記録が残されており、書簡の類から多くの時代の推移を語る写真に至るまで、貴重な資料が保存され続けた。それらの中に、驚くべき先生のご逝去後のカルヴァー望遠鏡の「身の置き所」を示す写真が見出されたのだった。以下の二点は、富田氏より提供されたものであり、余りにも眼から鱗というべき代物だったのである。



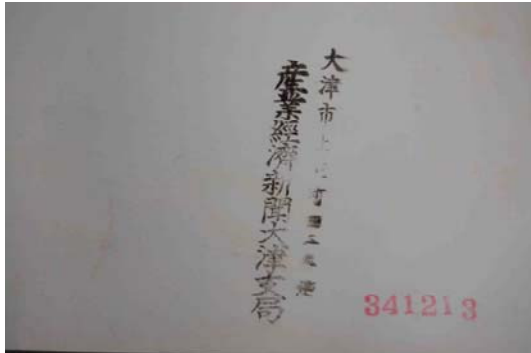
写真左 一時帰郷の 46 センチ鏡
(昭和 34 年 12 月 13 日)

写真下 カルヴァー代替屈折鏡
(昭和 34 年 12 月 13 日)



以上の二枚の写真は、山本先生ご逝去後に一時帰郷した、46 センチカルヴァーの主鏡と斜鏡副鏡類であり、また、観測室のカルヴァー望遠鏡不在期間中に仮設置されたと思しき屈折赤道儀である。山本天文台にとにかく戻された事を遺影に報告されるときのご令室は、ある種の安堵感を湛えたお姿に見受けられる。

これらの写真の撮影時期は、実は富田氏より提供いただいた時は、昭和 34 年秋以降、もしくは翌年の適宜な時期程度の類推しか可能ではなかったものが、本年盛夏の第三回天文台アーカイブ集会の折、閲覧を許された数多くの写真遺品類の検証から、昭和 34 年 12 月 13 日と特定された。この二枚の写真には、裏書として産業経済新聞大津支局 341213 と社名と日時ゴム印が押されており、この事は新聞社が山本家に帰還した 46 センチ望遠鏡の事を伝え聞き、山本先生逝去後の後日談の一つとして記事取材を試みた事までをも意味した。同新聞の記事として紹介されたのか否かは不明であるが興味深い。



写真左は、山本家に 46 センチ望遠鏡の帰還した事を証明する、産経新聞社の裏押しスタンプである。また、望遠鏡を覗くご令室様の写真も同様の日付となっている。

なお、アナナイ天文台の当時の関係者の記憶によれば、山本家に戻されたのは、既に寒くなった時期との事で、昭和 34 年 12 月頃であろうと思われる。

以上が判明するまでは、現在ご存命の関係者及び、教団中央天文台の後継を全うされる静岡県函南町の公益法人・月光天文台各位による証言から類推するより方法は無かったが、それらは次の項で詳述する筆者の僅かな記憶とも照らし合わせて、この数年に生じた事跡とともに、欠落した変転の記録を補完することとなった。なお、これらの経緯を確認するまでは、一年以上二年以下程度は、再び岐阜市の私立高校に売却設置されるまで、沼津市に置かれ続けたままと誤認識をしていた筆者の理解不足をお詫びしたい。

(4) 山本天文台帰郷前後の事実関係

上記にその概略を示したカルヴァー46 センチ望遠鏡の変転については、以下、出来る限りの詳述を試みる如く、短期間に目まぐるしい変転を経験した。

山本先生のご逝去後、少なくとも昭和 34 年 12 月初旬程度まで、アナナイ教団の沼津市の中央天文台に置かれたままであった。これは先生のご逝去という混乱期にあって、当然の事であったとは言えるであろう。果たしていつまで貸与のままであったかは、詳細は不明ながら側面的な事象と時系列の整理からは、おおよそ類推される。



アナナイ中央天文台の 46 センチ鏡



1959年7月1日 台員全部
三階のカルバー前にて
昭和 34 年 7 月 1 日、同天文台員

上記の二枚の写真は、沼津市アナナイ中央天文台設置時のカルヴァー46 センチ望遠鏡と、その時期に山本先生から遺戒薫陶を受けた若き天文台の面々である。ただし、天文台全員と記述のある望遠鏡の傍らの面々の写真は、既に故郷の滋賀県にて先生が逝去された半年後の、同年 7 月 1 日の状況を物語るものである。余談ながら、山本先生はご自分が中心に立たれて京都大学花山天文台で展開された天文同好会、すなわち東亜天文学学会・OAA の将来の安定化を目指し、京大退官後には滋賀県を中心として同好的組織として運用された同会の永の将来を、このアナナイ中央天文台とその組織に委ねられようとしたと思われる彼ら青年諸氏に、積年の想いを託されようとしたと思えてならない。一抹の寂しさを感じるのは、それらの事情を多少なりとも知る筆者のみの感慨であろうか。

さて、これらの写真は、既に本拙稿の始めの部分に示した、驚くべきご令室・山本英子氏のお姿と山本先生のご遺影、また、その場に姿を現している口径 46 センチ鏡の姿として継承をされていく事となる。

昭和 32 年当時、アナナイ中央天文台の落成に対して、既に他の拙稿にて報告をした事でもあるが、同天文台に設置する機材の未決定に対して、台長でもあった山本先生のカルヴァー46 センチ望遠鏡を一時移設して、急場に備えろとの方針からこの機材は移転を余儀なくされたものであった。そして、双方の意見の相違対立その他から、ご自身は滋賀の天文台に一時的に戻られ、そのまま病魔に臥され逝去された先生の事後処理から、この望遠鏡の流転が始まる。

少なくともご逝去後は、昭和 34 年 7 月 1 日づけの写真の物語るように、一年弱はアナナイ中央天文台に設置されつづけ、同年 12 月には、同機は山本天文台に戻された。遺影の前の返還された光学系一式と英子未亡人のお姿は、前述したように 12 月 13 日と確認され、その帰還の証拠写真としてカルヴァー46 センチ来歴に記述された。

このように、先生遺影の前の 46 センチ光学系の写真は、今まで、全く山本家に返還される事なく、そのまま亡父・坂井義雄幹旋の下、よく知られたように岐阜市の富田学園高校に売却されたという事実を明確に崩すという事実の発掘となった。その後、果たして望遠鏡はいつまで山本家に保管されつづけたのかという時期についても、必ずしも明確ではないが、おおよそ以下のように推定される。半年程度の時期の不確定と異動を前提とはするが、亡父・坂井義雄経営の岐阜での望遠鏡工場預かりを経て、富田学園に売却幹旋をされていく事となる。なお、山本家返還に関しては、ご令息・山本進氏による教団側への正式返還要求(教団関係者証言)を経て、教団側自主的に返還作業をなしたのか、または山本家の主導により、滋賀より受け取りに赴いたのか、その作業者名とともに、当時の状況は全く明らかになってはいない。以下は絞り込める範囲での、カルヴァー46 センチ望遠鏡の異動事情である。

- ・ 山本先生逝去の年の昭和 34 年 7 月までは、アナナイ中央天文台設置を確認
- ・ 昭和 34 年 7 月以降 12 月初旬程度までは、アナナイ中央天文台に継続設置の可能性(山本天文台への返還日時は不明ながら、昭和 34 年初冬あたりとの証言)
- ・ 昭和 34 年 12 月 13 日の新聞社取材写真二枚にて山本天文台返還を確認
- ・ 昭和 36 年、岐阜市の富田学園天文台売却方針の下、機材の改修のため、岐阜市の坂井義雄経営の機械工場にて必要作業実施、同時に山本天文台の屈折望遠鏡も修復作業を実施した模様
- ・ 昭和 37 年初春のころ富田学園に納入設置作業、同年 5 月 14 日特別校舎建設落慶 @ 以上を経て、平成 4 年 9 月 7 日(1992 年)、嘗ての約定により、学園にとり不要となった同望遠鏡を亡父・坂井義雄にて引き取り実施。その後は、再生を意図するも時期に至らず、約 20 年間を経て保管のみを続けた。



富田学園 46センチ カルヴァー鏡
山本一清博士愛用のカルヴァー鏡は、老朽化がひどかった。

富田学園は、富田女子高校、男子校の岐阜東高校の二校を擁し、独自の高校教育を推進している。左は岐阜東高校の十年誌、右は自費発行「UFO の謎」より抜粋した、担当の森敬明教諭とカルヴァー望遠鏡である。森氏は一晩に彗星二つを発見し話題となる。

(5) 花山へ・・・未来へ(展望)

さて、上記の変遷については、昨年の第二回京大アーカイブ報告会で、その概要の講演の機会を得、詳細は集録に留めて今日に至っている。そして、故・坂井義雄遺族として諸般の事情も絡めて、カルヴァー46センチ反射望遠鏡は、花山天文台に寄付を前提として、平成23年6月管理移管をなした。そのあたりの経緯と詳細は、第二回集録の拙稿と各位様玉稿、また京都大学宇宙会誌拙稿に詳しく、併せてご照覧願わしい。

花山へ・・・未来へ・・・と言うは、山本先生を始めとし、その志を持たれた方々への畏敬と鎮魂の代わりとなれば、遺族関係者としてはこの上もなき幸である。下記の写真は、幽冥異にされた恩師・山本先生とご令室・英子様、そして、同じく渡辺敏夫先生と坂井義雄である。背景はアナナイ教団の祭礼の折を物語るものであり、沼津市での昭和32年9月21日の天文祭りの折の記念写真と思われる。これを奇異と感じるか、古い昔の古事記的記憶の裏打ちと考えるかは、各位様に委ねたい。ご子息の山本進氏より、嘗て反射鏡だけでも山本家に戻してもらいたいとのご希望も寄せられた。今、そのすべてが京都大学花山天文台に集約された現在、そのお気持ちにも応えられたと信じたい。

カルヴァー望遠鏡が、アナナイ中央天文台を離れて既に五十年、そして、再度修復を果たし、天体の光を花山天文台で再び呼び戻して、これら先達の心が伝えられ続ける未来を夢に見たいと願う次第である。



左より山本博士 渡辺敏夫博士
ご令室・英子様 坂井義雄
(昭和32年9月21日・推定)



花山天文台保管のカルヴァー
46センチ望遠鏡筒
(平成11年6月13日)

2012年9月20日